

◆「中・高の接続が生徒の学習のつまづきをなくす」

(進研ニュース VIEW21 1999.10)

2 中・高の接続が生徒の学習のつまづきをなくす

教科指導の中高連携とは？

授業や教科指導の共同研究の場を

教科指導は、学習指導要領によって中学校と高校の連続性が図られてはいない。だが「高校に進学した途端に、授業が急に難しくなり、嫌いになった」と感じる生徒は少なくないようだ。

高校1年生の段階で学習につまずく生徒が多いのは、一つには進度の速くなった授業に戸惑っているという理由がある。中学校では、副教材やOHPなど様々な教育機器を使って比較的じっくり教えていく余裕があったが、高校は学ぶ量が多いためどうしても消化不良の生徒が生まれがちだ。

もう一つは教師が「中学校の段階で、当然この程度のことでは習得しているだろう」と前提にしていることを、実は生徒が身に付けていない場合が考えられる。中学校で生徒がどの分野をしつかり学び、どの分野は十分に学んでい

ないかを教師が正確に把握していないと、生徒は学習につまずいてしまう。

高校入学後に授業に付いていけなくなる生徒を減らすためには、まず中学校の教科書と学習指導要領に目を通して、彼らが何をどんな風に学んできたかを把握することで、ある程度まで改善できるはずだ。だがもう一歩進んで、中学校と高校の教師が連絡を取り合っており、双方の教科指導の違いを把握したり、要望を出す場を設定できればなお効果的だろう。具体的な連携としては、

実践

つなぎ教材の作成

中・高の教師がペアで教材作りに挑む

学習指導での中高連携を積極的に進

以下のような内容が考えられる。

- ①教科指導の共同研究。中学校と高校の指導方法、教科書、教材、学習内容、指導計画書の確認
- ②生徒の実態把握。中学生と高校生の学習意欲や家庭学習時間、得意・不得意分野、誤りやすい事項等の確認
- ③中・高双方の授業見学により、授業形態や進行速度の違い等の確認
- ④は学校単位の大掛かりなものだが、
- ⑤に関しては地域の個人のネットワークによる活動も十分に可能だ。

①

める都道府県の一つとして、福島県が挙げられる。福島県でも中学校から高校に進学する段階で、各教科を嫌いななる生徒が多いことが問題となっていた(左頁グラフ参照)。県では'97年度よ

り中・高連携学習指導研究委員会を設置('99年度末で終了の予定。国語、英語、数学の3教科について、中学校と高校の教師が集まって共同研究を行った。中・高連携学習指導研究委員会が取り組んだ事業の一つは、つなぎ教材用冊子「サクシード」(国語・数学・英語)の作成、もう一つは中高相互の授業公開である。

つなぎ教材は、文字通り中学校と高校の間をつなぐ教材。高校生がある教科や分野を嫌いになるきっかけは、中学校段階でその分野に関する理解が不十分なまま卒業して、高校でさらに高度なレベルを学ぶというケースが多い。そこで「サクシード」では、生徒が誤りを起こしやすい事項を確認。その誤りがどの学年でなぜ起きるかを分析し、つまづきをなくすための学習指導上の工夫の提案をしている。中・高双方の教師に利用してもらうことで、接続をスムーズに行うことを目的としている。入学直後の数回の授業を「サクシード」を基に進めたり、新しい単元に入る際の教材として活用されている。内容はかなり緻密で、例えば「サクシードⅡ・数学」では、「数と式」「関数」「図形」「証明・文章題」の各領域で、生徒がつまづきやすい計26事項について、「つまづきの内容」「つまづき